

## 仏教における生命観の一側面

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 杉本 卓州   |
| 雑誌名 | 論集  |
| 巻   | 4   |
| ページ | 1-11  |
| 発行年 | 1977-12-10  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/00127974">http://hdl.handle.net/10097/00127974</a> |

## 仏教における生命観の一側面

杉 本 卓 洲

仏教の生命観については種々の視点から究明が可能であろうが、ここでは仏教は草木に生命（靈魂）を認めるか否かという点を主眼において、この問題にアプローチを試みたい。

先ず仏教の中には、周知のごとく「草木国土悉皆成仏」という思想が存在する。この思想は中国において誕生を見、わが国において非常な展開がなされたと言われる。そして、それが定着するまでには色々と紆余曲折があり、種々の論争がかわされたが、何よりも先ず、草木が生命あるもの、すなわち有情なのか、それとも生命のない非情なものなのか、という点が問題となった。

しかし、一般には草木を非情なものとなした上で、成仏することを説く方が多いようである。つまり有情と非情との差別を否定することによって、有情・非情の両者の同時成仏を説くのである。或いはまた、有情・非情ともに同一の仏身より生じたものであり、同一の仏性である故に、非情なる草木も発心して成仏すると主張する場合もある。このような非情のままでも草木は成仏するとする説に対して、草木を有情と認めるのが次のような例である。

先ず空海は『卍字義』において、「草木また成（仏）す、何に況んや有情をや。」と説き、草木成仏説を六大縁起の理論によって論証する。すなわち一切の世界は、地・水・火・風・空・識の六大によって生起されるものである故、

草木もこのすべてから成っている。最後の識も含まれているわけだから、草木には心があることになり、発心して修行をなし成仏する、と言うのである。

また良源は『草木発心修行成仏記』の中で、「草木既に生・住・異・滅の四相を具す。是れ則ち草木の発心・修行・菩提・涅槃の姿なり。是れ豈に有情の類に非ずや。故に知る、草木発心修行の時、有情も同じく修行し、有情発心修行の時、草木も亦発心修行するなり。」と説き、草木を明確に有情と見なしている。こうした草木観が特に天台教学において伝承され、草木が芽を出し、花を開き、実を結ぶといった経過が、草木が発心し、修行し、成仏する姿と理解され、草木成仏説が不動のものとなるのである。<sup>(1)</sup>

ところで、このような草木を有情とみるか否かの問題は、インドにおいてはどのような状況であったのであろうか。この点を、律文献から、雨安居が制定されるに到った因縁（理由）を中心にして探ってみたい。

先ず『パーリ律』によると、それは次のような世人の比丘たちに対する非難に依るとされる。

「沙門釈子たちは冬期も夏期も雨期も遊行して、青草を踏みつけ、一根の生命 (ekindriya jīva) を傷つけ、多くの小さな生物 (khuddaka pāna) を殺している。他の異学派の人 (tīthiya 外道) たちは、その教法は悪説であっても、雨安居を求め、これを構えている。鳥たちも樹の頂きに巢を作って雨安居を求め、これを構えているのに。」  
そこで仏陀は、比丘たちに「雨安居に入るのを許す。」(anujānāmi vassam upagantum) と告げるのである。<sup>(2)</sup>

次に『四分律』では、六群比丘が春・夏・冬の一切時に遊行し、生草木を踏殺したことが、居士たちに譏嫌されるところとなっている。

仏は六群比丘を呵責して、「汝の為すところは非である。沙門の法に非ざるものである。居士たちは草木において命

根想を有している。彼らを譏嫌させ、罪あらしめてはならない。」と説き、「今より以後、諸の比丘、三月夏安居するを聴す」と宣言している。<sup>(3)</sup>

これと類似のことが、六群比丘尼に対しても語られているが、ここでは「この比丘尼たちは慚愧を知らない。衆生の命を断じている。」と非難がなされている。<sup>(4)</sup>

また草を焼いたことが、衆生の命を断ずるとして批判され、仏によってそのようなことをしてはならないと命じられている場合もある。<sup>(5)</sup>

ところが『五分律』になると、微妙な違いが出てくる。すなわち、比丘たちは「虫草を踏殺した」と言われ、「常に衆生を慈愍し護念せよと説きながら、(虫草を)踐踏して仁惻の心が無い。」と責められるのである。<sup>(6)</sup> また次のような話もある。

一人の肥大なる比丘が死んだ。生草の上に挙げ著いていたところ、脂が流れて生草を殺した。諸の外道が生命を傷殺していると批判する。そこで仏は、生物上に屍体をおくべきでない。埋めるか焼くか、石の上におくように、と命じたのである。<sup>(7)</sup>

『摩訶僧祇律』は特異な説き方をしている。ここにはただ、雨時に遊行して踐害するところ多く、そのために世人に嫌われたとあるにすぎず、草木や虫等にはふれられていない。<sup>(8)</sup> ところが、比丘たちが寒く雪のふれる時、火を燃やし暖をとった際の、世人の非難の言は注目される。

それは、「沙門瞿曇は殺生を毀咎し、不殺を讃歎したのに、比丘たちは火を燃やし、地を焼きて、傍一根をみだしている。」というのである。<sup>(9)</sup> 傍一根の傍とは傍生の略語で動物を、一根とは一根の生命である植物を、もしくは地・水・火・風を指しているものと考えられる。

次に『十誦律』によれば、「生草を踐躪し、諸虫の命を奪えり。」とあり、異道の出家たちから「沙門釈子は物命を残害す。」と非難される。<sup>(10)</sup> また火を放ち、草木を焼いた場合には、「多くの種々なる虫を殺せり。」と説かれて<sup>(11)</sup>いる。

最後に『根本説一切有部毘奈耶安居事』を見ると、比丘たちは夏中に遊行して虫蟻を傷殺したと記され、諸の外道の批判は、「この沙門釈子は慈悲がない。夏中に遊行して諸の虫類を殺した。俗流と異ならない。」というようになっている。<sup>(12)</sup>

以上六種の律文献を簡単に概観したが、漸次内容が微妙に変容してきているのが知られる。すなわち、夏中（雨時）に遊行することが、初めは青草や生草木を踏み生命を殺すとされるのが、後になると虫を殺す方に強調がおかれるようになってくるのである。最後の例では草は何ら言及されず、専ら虫類のみが関心事とされている。

一体このような変化は、何を意味しているのであろうか。

この疑問の解消は、草木を生命あるもの、即ち有情もしくは衆生とみなすか否か、という問題と密接に関わっている。今まで見たところから判断するならば、一応次のような順序でもって理解することが可能であろう。

- ① 一般世人もしくは異学派（外道）の人たちは、草木は一根（一つの感覚器官、触覚）をもつ生命であり、草を踏みつけたり焼いたりすることは、そのまま生命あるもの、すなわち衆生（有情）を傷殺することと解した。
- ② 仏教教団側も一応この見方を否定はしなかったが、同時に草の中に住む小生物、すなわち虫類を殺すことを問題とする傾向にあった。

③ しかし、草木自体は衆生（有情）ではないとの見解が漸次確立され、草を踏んだり焼いたりすることは、草中に住む衆生（有情）である虫類を殺すことになるから、夏中の遊行や寒中の焚火などは善くないとの解釈がなされた。

このような草木観・衆生観の仏教の外と内とでの相違、仏教内での変化に関しては、草木を傷つけてはならないという、いわゆる「壊生種戒」に対する諸律の注釈の比較検討によっても、同様な跡づけが可能である。この方面については別に論ずることとして、<sup>(13)</sup>ここでは特に右にあげた三点の中の最初の問題について論究することとしたい。

それは仏教外の思想にあって、何故草木が生命あるものとみなされたかという問題である。これに対する解答として先ず考えられるのが、草木も輪廻するという思想である。そして人間の側から言うならば、人間も草木に再生することがあり得るということになる。こうした考えは、ジャイナや正統バラモンの間では一般的に認められていたように、仏教がこれに否定的な立場をとったと言える。

先ずジャイナではどのような説き方をするか見てみよう。<sup>(14)</sup>

生命 (jīva) には二種類あるとされ、一つは輪廻するもの (saṃsārātthā)、二は成就せるもの (siddha、解脱者) とに分けられる。そして輪廻するものの中には、動くもの (tasa) と動かないもの (thavara) とがあげられ、前者には火・風・動物 (urāla、器官をもつもの)、後者には地・水・植物 (vaṇassa) が置かれる。

動物は二つ以上の根すなわち感覚器官をもつものとされ、五根を有する者として①地獄の居住者 (neraya)、②動物すなわち畜生 (tirikha)、③人間 (maṇya)、④天 (deva) の四種があげられる。<sup>(15)</sup>

植物の方は微細なもの (subhna) と粗大なもの (bhāva) とに分けられ、更にそれぞれ発達せるもの (pajatta) と発達せざるもの (apajatta) とに細分される。その中で粗大にして発達せるものは、世界の一部にあるのみであると言われるが、最も詳細に説明されており、玉ねぎ・にんにく・バナナ等の二十二種が「多くのものが一体をなせるもの」 (sāhārasarīra) と呼ばれる部類、木・草・蔓の類十二種が「各自独立の体をもっているもの」 (pattegasarīra) と

呼ばれる部類に入るとされる。<sup>(16)</sup>

かくして、植物は輪廻するものの中の一部であって、当然傷つけてはならぬものとなるわけである。すなわち、植物は人間と同様に生れ、老いる本性を有し (jāi-dhammaya, vuddhi-dhammaya) / 意識をもつもの (cittamānta-yam) であって、これを知る賢者は「植物に対する傷害」<sup>(17)</sup> (vaṇassasattham samāraṇḍhejja) をなしてはならないし、他の者にもさせてはならないと命じられるのである。

ところで、このジャイナの教説の中で興味深いのは、仏教で説く輪廻の五趣もしくは五道（地獄・餓鬼・畜生・人間・天〔阿修羅を入れて六趣・六道ともされる〕）に対比出来るものが、五根を有する動物にあげられていることである。ここには四趣が並挙されているわけであるが、ジャイナと仏教との輪廻世界の設定の仕方での相違を知ることが出来る。

それでは次に、バラモン側の見解はどのようなであろうか。ここでは『マヌ法典』や『ヤージュニヤヴァルキヤ法典』等から探ってみよう。

先ず『マヌ法典』によれば、いかなるグナ (guna, 性質・徳) によっていかなる輪廻を得るかが、次のように説かれる。

サットヴァの性質の者 (sattvika) は神 (deva) となり、ラジャスの性質の者 (rājasa) は人間となり、タマスの性質の者 (tāmasa) は動物 (畜生) となる。これが三種の道 (gati, 趣) である。

しかしこの三種の道には、また各人の行為と知識の相違によって、それぞれ低・中・高の三種の別がある。

タマスの性質の最も低い道は、動かざるもの (sthāvara, 草木)、昆虫、魚類、蛇、亀、家畜、野獣であり、中位の

道は、象、馬、シュードラ、賤しむべきムレーツチャ、ライオン、虎、野猪であり、最高の道は、チャーラナ (cāraṇa, 吟遊詩人・旅役者等のカースト)、スバルナ (suparna, 神話的な鳥)、詐欺師、ラクシヤス (rakṣas, 悪魔)、ピシャーチャ (piśāca, 食血肉鬼) である。

次に、ラジャスの性質の最低の道は、ジャッラ (Jalla)・マッラ (Malla)・ナタ (Nata) (等のクシャトリヤのヴァーティヤから生れた賤民)、賤業に従事する者、ギャンブルや飲酒に耽る者、中位の道は王、クシャトリヤ、王室づきの司祭官、論争を好む者、最高の道はガンダルヴァ (Gandharva, 音楽神)、グフヤカ (Guhya, 財宝の守護神)、ヤクシャ (Yakṣa, 夜叉)、神々の従者、アプサラス (Apsaras, 天女) が、それぞれあげられる。

最後のサットヴァの性質のものに関しては、その最初の道には苦行者 (Tapasa, 林住者)、隠遁者 (Yati, 遊行者)、司祭者 (Vipra, バラモン)、ヴァイマーニカ神群 (Vaimānikagana)、月宿 (nakṣatra)、ダイティヤ (Daitya)、第二 (中位) の道には供儀をなす者、聖仙、神々、ヴェーダ、天光 (jyotiḥ)、年、祖霊、サードウヤ (Sādhyā, 神々を援けて悪魔と戦う半人半神)、最高の道にはブラフマー (梵天)、一切の創造神、ダルマ、偉大なる者、非顕現 (avyakta) が、それぞれあげられる。

またこの世において、如何なる行為をなせば如何なる胎に入るかが説かれる。

大罪を犯した者 (mahāpātaka) は多年の間地獄 (naraka) において過し、刑を終えた後も次のような生れを得る。バラモンの殺害者は、犬・豚・驢馬・駱駝・牛・山羊・羊・鹿・鳥・チャンダーラ・ブツカサの胎に入り、スラー酒を飲みたるバラモンは大小の昆虫・蛾・糞を食する鳥・危害を与える野獣の胎に入り、盗みをなせるバラモンは千回、蜘蛛・蛇・蜥蜴・水棲動物・危害を加えるピシャーチャの胎に入り、グルの臥床を侵した者 (gurutalpa, 師の



妻と姪行をなしたる者の意<sup>(18)</sup>は百度、草・灌木・蔓草・肉食獸・牙を有する獸・残忍な行為をなす猛獸の胎に入るといふのである。

『ヤージュニャヴァルキヤ法典』においても、ほぼ同様なことが規定されている。すなわち、他人の財物を取ろうとする者、不善のことを思う者、不真実を固執する者は最下生者の胎に、不真実を語る者・密告者・無責任な語を言う者・饒舌なる者は鳥獸の胎に生れ、不与取を喜ぶ者・他人の妻に親近する者・不法に生物を殺害する者は動、か、ざるもの<sup>(19)</sup>（草木）に再生するであろうと説かれる。

またバラモンを殺したり、スラー酒を飲んだり、金銭を盗んだり、師の臥床を侵害したり等の大罪を犯した者の再生の道も、先の『マヌ法典』の内容を簡略にした仕方で記されている<sup>(19)</sup>。

このように、バラモン法典の規定の中には、極めて具体的なかたちで輪廻の様態が叙述されているが、人間が草木にも再生することが明記されているのである。

またここには、バラモン側の独特なる輪廻の道の分類法、輪廻説の倫理的応用化が見られ、先述のジャイナのそれとは大分趣きを異にしているのが知られる。

さて、以上みてきたように、ジャイナ及びバラモン側における輪廻世界の中には、動かざるもの、すなわち草木が明らかに登場させられていた。それならば仏教ではどうなのであろうか。結論的に言って、仏典の中に輪廻の世界に草木も含むとする教説は、仲々発見することが困難である。

ところで、仏教が輪廻説を採用するに到った理由については種々考えられようが、肉食の否定の根拠づけに採用されている点も注意さるべきである。たとえば時代的にはかなり降るが、『央掘摩羅経』や『入楞伽経』等に説かれた

見解があげられよう。

「一切衆生は無始の生死より生生輪転し、父母兄弟姉妹にあらざるなし。」とか、「一切衆生は無始より来り、生死の中に在りて輪廻して息まず。曾て父母兄弟、男女の眷属乃至朋友、親愛なる侍使にならざるなし。生を易え鳥獸等の身を受く。」とか言われ、それ故に肉食は親族を食することになると結論づけられるのである。<sup>(20)</sup>

更に徹底した主張が、中国産と言われる経典『梵網経』の中で展開されている。

「仏子は慈心を以て放生の業を行ぜよ。一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母なり。我れ生生にこれに従って生を受けざるなし。故に六道の衆生は是れ我が父母なり。而るにそれを殺して食するは、即ち我が父母を殺し、亦我が故身を殺すなり。一切の地水は是れ我が先身、一切の火風は是れ我が本体なり。故に常に放生の業を行ぜよ。<sup>(21)</sup>」

これらの記事の中には草木についての言及は見られない。しかし、最後の部分には先述のジャイナ説に近い理念も感得される。仏教が、草木にも生命を認めるといふ、いわゆるアニミズム的世界観と訣別したことは、仏教自からがインドの思想であることを否定したと言っても過言ではなからう。しかし、漸次インドを離れるにしたがって、東南アジア一帯に固有なるこうしたアニミズム的信仰を摂取せざるを得ず、新たな生命観、そしてそれに基づく新たな倫理観、更には仏教独特の自然世界の理念化、即ち草木成仏論の樹立が企てられるようになったと解される。<sup>(22)</sup>このように仏教における生命観、特に草木観は、仏教思想史上看過し得ないいくつかの問題を、われわれに提供するものと言ふことが出来よう。

- (1) 窺基撰『成唯識論述記』にも「草木も衆生なれば亦應に利樂すべし。」とあり、衆生が草木にも及ぶことが説かれている。『望月仏教大辞典』1、二一〇頁、同4、三一五～三一六頁。坂本幸男「草木成仏について」(第九回国際宗教史学会議研究報告、昭和三十三年八月二十八日～三十日)等参照。
- (2) Vin. I. 137. cf. IV. 296～297.
- (3) 「四分律」卷三七(大正二二、八三〇b～c)。
- (4) 同右卷二六(大正二二、七四六a～b)。
- (5) 同右卷五一(大正二二、九六〇a)。
- (6) 「五分律」卷一九(大正二二、一二九a)。
- (7) 同右卷二一(大正二二、一四三b)。
- (8) 「摩訶僧祇律」卷二七(大正二二、四五〇c～四五一a)。
- (9) 同右卷三二(大正二二、四九五a)。
- (10) 「十誦律」卷二四(大正二二、一七三b)。同卷四四(同、三二二b～c)参照。
- (11) 同右卷三八(大正二二、二七四b)。
- (12) 「根本説一切有部毘奈耶安居事」卷一(大正二二、一〇四一b)。
- (13) 「Bhūtaśāstra」に於て——壞生種戒考——のタイトルの許に「印度學仏教学研究」第二十六卷に発表の予定である。
- (14) Uttarādhyāyana-sūtra. XXXVI. 48ff. cf. SBE. XLV. pp. 210ff. 金倉圓照「印度精神文化の研究」一一八頁以下参照。
- (15) Ibid. XXXVI. 156 ff. 更に細分化されて地獄は七地獄、動物は水中・地上・空中の三種、人間は偶発生のもの(sammuti-hima)と母胎から生れるもの(gabdhavakantiya)の二種あり、後者は更に三分される。天は大きく四種 ① Bhomija, ② Vānāntara, ③ Joisa, ④ Vemāñjā に分けられ、更にそれぞれ細分される。
- (16) 植物の中で微細なものは一種のみで全世界に広がるものとされるが、どのようなものか説明がない。Ibid. XXXVI. 101.
- (17) Āyāraṅga Sutta. I. 1.5.6～7. cf. SBE. XXII. pp. 10～11.
- (18) Manu. XII. 39～58. SBE. XXV. pp. 493ff. 田辺繁子訳「マヌの法典」三六六頁以下参照。ここに説かれた三徳による輪廻世界の区分法は、天界・人界・獣及び草木界の三界に分かつサーンクヤ派のそれと類似を見る。
- (19) Vajñ. III. 131～140; 206～208. 中野養照訳「ヤーシュニャヴァルキヤ法典」一二二頁、一二二頁参照。
- (20) 「央掘摩羅經」卷四(大正二、五四〇c)、「入楞伽經」卷八(大正一六、五六一b)、「大乘入楞伽經」卷六(大正一六、六二三

- a)。Lankavatāra Sūtra. ed. by B. Nanjio. p. 245. 安井広済訳『梵文和訳入楞伽經』(法藏館、昭51)二二三頁参照。
- (21) 『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品』第十卷下(大正二四、一〇〇六b)。放生の業は周知の如く、放生会として行事化される。尚、食肉と不殺生の理念とは密接な関係にある。cf. Hanns-Peter Schmidt; The Origin of Ahimsā. Mélanges d'Indianisme a la mémoire de Louis Renou. Paris 1968. pp. 625~655.
- (22) わが国においては、特に東北地方に、背面に「一仏成道觀見法界 草木国土悉皆成仏」なる文を刻む、「草木塔」と呼ばれる石塔が散在しており、草木崇拜の痕跡のみられることは注目すべきである。